

積分方程式法による固有値問題の精度解析について

京都大学工学部 正員 丹羽義次

京都大学工学部 正員 小林昭一

京都大学工学部 正員 北原道弘

[1] はじめに 弾性体の固有値問題を積分方程式法により解く方法およびこの方法による固有値解析の特徴が明らかにされつつあり、ある種の積分方程式を用いた場合の固有値の精度はかなりよいことがわかっている。単に積分方程式といっても定式化によりさまざまな積分方程式が構成されるわけであって、各種積分方程式による固有値、固有密度、固有モードの精度を統一的に確認しておくことが必要と思われる。本報告では平面弾性問題における面外振動問題について、Green、Layer表示により、オ1種、オ2種積分方程式および混合問題の積分方程式を構成し、固有値、固有密度、固有モードの精度を検討し、最後に面内振動問題の固有値、固有密度、固有モードの解析例を示す。

[2] 基本解と積分方程式 2次元定常弾性問題の基本解は次のようになる。

面内振動問題 : $u = \frac{1}{4\pi} [H_0^*(k_r r)] + \frac{1}{4\pi} \sum_{n=1}^{\infty} \{ H_n^*(k_r r) - H_n^*(k_L r) \}$

面外振動問題 : $u = \frac{1}{4\pi} H_0^*(k_r r)$ ($k_r = \gamma k$, $k_L = \gamma k_L$ はそれぞれ横波、縦波の波数)

積分方程式の各種定式化による固有値の精度を検討するために次の積分方程式を考える。

(A) オー種(変位)問題 (F.I.)

(B) オニ種(応力)問題 (S.I.)

(i) $\oint \mathcal{S} u = 0$ (F.I.(G), F.E.(G))

(i) $\oint \mathcal{D}_n u = 0$ (S.I.(G), S.E.(G))

(ii) $(\frac{1}{2}\mathcal{I} - \mathcal{K}) u = 0$ (F.I.(G), S.E.(L))

(ii) $(\frac{1}{2}\mathcal{I} + \mathcal{K}^*) u = 0$ (S.I.(G), F.E.(L))

(iii) $(\frac{1}{2}\mathcal{I} - \mathcal{K}^*) u = 0$ (F.I.(L), S.E.(G))

(iii) $(\frac{1}{2}\mathcal{I} + \mathcal{K}) u = 0$ (S.I.(L), F.E.(G))

(C) オニ種(混合)問題 (M.I.) : (i) は ∂u , ∂t 共に変位表示を、(ii) は ∂u は変位、 ∂t は応力表示

(i) $\begin{cases} (\mathcal{S} t)_{\partial u}^{(x)} - (\mathcal{K}^* u)_{\partial t}^{(x)} = 0 & x \in \partial u \text{ (M.I.(G))} \\ (\mathcal{S} t)_{\partial u}^{(x)} - [(\frac{1}{2}\mathcal{I} + \mathcal{K}^*) u]_{\partial t}^{(x)} = 0 & x \in \partial t \end{cases}$ を用いた Green 積分表示式による積分方程式。

(ii) $\begin{cases} (\mathcal{S} t)_{\partial u}^{(x)} - (\mathcal{K} u)_{\partial t}^{(x)} = 0 & x \in \partial u \text{ (M.I.(G))} \\ (\mathcal{K} t)_{\partial u}^{(x)} - (\mathcal{D}_n u)_{\partial t}^{(x)} = 0 & x \in \partial t \end{cases}$

上に示した積分作用素は、 $\mathcal{S}$: 1重層、 $\mathcal{K}$: 1重層の微分、 $\mathcal{K}^*$: 2重層、 $\mathcal{D}_n$: 2重層の微分に対応している。

[3] 各種積分方程式による固有値の精度について Table 1, 2 はそれぞれ正方形、面

外振動に対するオー種、オニ種問題の固有値の精度を示しており、各欄のオ1、オ2、オ3列はそれぞれ積分核 $\mathcal{S}$, $\mathcal{K}$, $\mathcal{K}^*$ (Table 1), $\mathcal{D}_n$, $-\mathcal{K}^*$, $-\mathcal{K}$ (Table 2) を持つ積分方程式により求めた固有値および相対誤差をパーセントで示している。Table 3 は直角二等辺三角形(斜辺の長さ $\sqrt{2}$)の斜辺の面外変位を固定したオニ種問題の固有値を(C)(i)の方法により求めた結果を示している。3つの問題に対し、どの積分方程式を用いても、ほぼ

Table 1 Eigenvalues of the first problem (square (a=0.5), $\gamma=28$, $\gamma_L=0.1$, 8-point Gauss)

γ	1	2	3	4	5	6
0	6.443	2.025	9.935	12.953	16.919	19.110
1	4.4	4.4	7.0	9.9	9.9	12.9
2	0.98	0.98	0.98	0.36	0.36	0.36
3	8.886	11.327	16.050	16.918	19.869	19.869
4	8.8	8.8	13.3	13.3	14.0	14.0
5	0.16	0.16	0.16	0.24	0.24	0.24
6	13.3	13.3	13.3	15.7	15.7	15.7
7	0.22	0.22	0.22	0.05	0.05	0.05

Table 2 Eigenvalues of the second problem (square (a=0.5), $\gamma=28$, $\gamma_L=0.1$, 8-point Gauss)

γ	1	2	3	4	5	6
0	3.142	6.283	9.425	12.566	15.708	18.850
1	2.6	3.2	6.3	9.4	9.5	12.5
2	10.88	1.85	1.85	0.27	0.27	0.27
3	6.443	7.025	9.935	12.953	16.919	19.110
4	4.3	4.3	7.0	7.1	9.9	9.9
5	3.22	1.28	1.28	4.63	0.36	0.36
6	8.886	11.327	16.050	16.918	19.869	19.869
7	8.7	8.7	8.9	13.3	13.3	13.4
8	2.09	0.16	0.16	1.12	0.26	0.26

Table 3 Eigenvalues of the third problem (triangular (sides: 1, $\sqrt{2}$, $\sqrt{2}$), $\gamma=0.01$, 8-point Gauss)

γ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
$\lambda_1^{(0)}$	3.142	6.283	9.425	12.566	15.708	18.850	21.991	25.132	28.273	31.415
$\lambda_1^{(1)}$	3.15	6.28	7.64	9.43	9.93	11.34	12.56	12.96	14.04	15.70
$ \lambda_1 - \lambda_1^{(0)} / \lambda_1^{(0)}$	0.35	0.05	0.21	0.05	0.05	0.13	0.05	0.05	0.07	0.05

1%以内の相対誤差内で固有値は求まることがわかる。

[4] 固有密度、固有モードの精度について Fig. 1-3 は Table 4 に

示した円形、面外振動の固有値について、境界分割数 N をそれぞれ 1, 8, 16 とし固有密度 (0 EP) と固有モード (x_1, x_2 軸上) を最小自乗法 (x_1 軸上の密度を 1.0 と指定) により求めたものである。 N の選び方の指針としては、密度半波長の内部に 3 点を含むように選んでいる。固有密度の精度について

Table 4 Eigenvalues of the first problem (circular (ep=0), $\Delta t=0.001$, 8-point Gauss on arc)

N	0	1	2
λ_1^0	2.405	3.832	5.136
λ_2^0	2.406	3.833	5.135
λ_3^0	0.04	0.03	0.02
λ_4^0	5.520	7.016	8.417
λ_5^0	5.521	7.017	8.417
λ_6^0	0.02	0.01	0.00
λ_7^0	8.654	10.173	11.620
λ_8^0	8.656	10.176	11.619
λ_9^0	0.02	0.03	0.01

では指定した値 1.0 の満足度が 1 つの目安となるが、今の場合各 N について小数点以下 2 ケタの精度で満足されている。 Table 5 は Fig. 1-3 に示した固有モードの精度を検討するために節円の半径を求めた結果を示している。これらの結果より、節線により決まる密度半波長を表現するに最低限必要な数の境界点とすれば、固有密度、固有モードはコンマ数パーセントの誤差内の精度で求まることがわかる。

Table 5 Radii of nodal circles ($N=16$ (n=0), $N=8$ (n=1), $N=16$ (n=2); 48-point Gauss on arc)

λ_i^0	n=0			n=1			n=2		
	λ_i^0	λ_i^0	λ_i^0	λ_i^0	λ_i^0	λ_i^0	λ_i^0	λ_i^0	
r_1	0.4357	0.3780	0.5462	0.3776	0.6101	0.4420			
r_2	0.4363	0.2789	0.9459	0.3774	0.5081	0.4442			
error	0.09	0.32	0.03	0.23	0.33	0.50			
r_1				0.6379	0.6896	0.7244			
r_2				0.6379	0.6873	0.7264			
error		0.00			1.06	0.28			

error = $|r_i - r_i^0|/r_i^0$ (%)

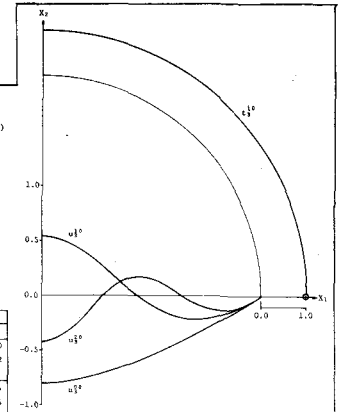


Fig. 1 Eigen densities and eigen modes for n=0 (N=8)

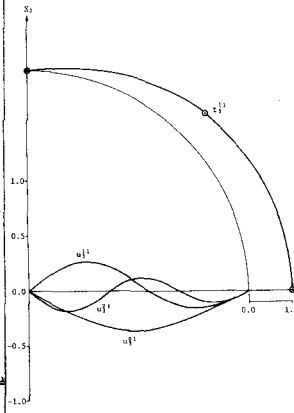


Fig. 2 Eigen densities and eigen modes for n=1 (N=8)

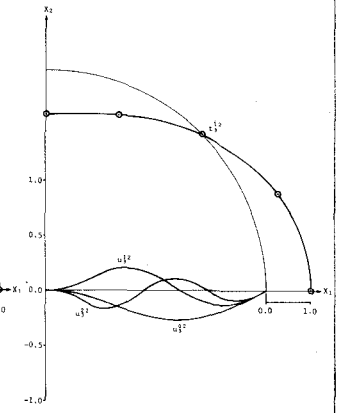


Fig. 3 Eigen densities and eigen modes for n=2 (N=16)

[5] 面内振動問題の固有値、固有密度

固有モード Fig. 4-6 は、円形、固定条

件のもとに、本手法により求めた固有値 ($N=28$) のうち、小さいものから 3 個 $\lambda_1^0=3.39$, $\lambda_2^0=3.85$, $\lambda_3^0=5.25$ に対する固有密度および固有モードを示している (ポアソン比 $\nu=0.25$)。円周の法線に示した実線、点線は u_1, u_2 の分布 (固有密度)、 x_1, x_2 軸の法線に示した実線、点線は u_1, u_2 の分布 (固有モード) を示している。これより、オ 1 モードは一軸引張的、オ 2 モードはせん断的、オ 3 モードは二軸圧伸的なモードであることがわかる。

[6] おわりに 積分核として $\mathcal{S}, \mathcal{K}, \mathcal{K}^*, \mathcal{W}_n$ いずれを含む積分方程式を構成しても固有値は精度よく求まることがわかった。面内振動問題の結果などの詳細は当日発表する。

